



編集後記

今年度の原稿依頼は、毎回いろいろなテーマを設定するものの、いろいろと書きにくかったらうと思いつつ、それでも原稿を提供してくださった皆様には、改めて感謝を申し上げたい。91号は1年の集大成という点から、各部会のふりかえりや、さまざまな自由投稿など学びの多い特集となった。

私たちに十字架のイエスが同じように見えているけれど、イエスとどのように繋がっているか、出会っているかといえば、それぞれ個別の違ったストーリーがある。巻頭言では、各人がそれについて考える機会をいただいた。親鸞が見ていた『貧しい庶民』とパウロが見ていた『異邦人』は、ある意味同じで、親鸞とパウロは他にも共通点があるのは興味深い。共通といえば、びわ湖とガリラヤ湖は似ている点があるという話をしてくださったのは、キム神父様だった。また、献金として見える形にすること、言葉にすることの大切さ、誰かを支える・信じる道をサポートしていく矜持など・・・。

人間と動物では、見えている世界が異なっているというが、今見ている世界の像は、「眼」という小さな器官から生み出される幻想の一つに過ぎないという説がある。そうだとすれば、自分が見ている現象が、唯一すべての世界や事実ではないということになる。自分の知らない世界が、見えていない・気づいていないことが、世の中にはまだまだあるのだ。多様性の社会では、自分が嫌だと思ふことを相手も嫌がるとは限らないし、自分がして欲しいからと相手にしても喜ばれるとは限らない。

だからこそ、これからの時代は対話が必要なのかもしれない。あなたは誰と対話をしていますか。